

フィリピン・北部ルソン社会における日系人のアイデンティティ

森 谷 裕美子

はじめに

かつて文化人類学では、その文化や言語等の違いから個々の集団と集団の間にはっきりとした境界があることを想定し、その集団の人々は皆、同じアイデンティティを持つものだと考えていた。しかしそうした視点は、内部の多様性の抑圧や個人の自由を奪い均質化を暗黙裡に是認する全体主義的なものであり、民主主義と敵対する「逃れるべきもの」であって、今やアイデンティティ概念は「もはや有効期限切れ」であるとすら見なされる〔上野 2005: 35〕。

しかしそのいっぽうで、現代の社会においては依然として民族紛争や宗教対立、先住民の権利、グローバル状況での人の移動や移動先での包摂と排除などといったアイデンティティをめぐる問題が多く発現しているのであって、アイデンティティ研究は文化人類学にとっても今なお重要なテーマであると言わざるを得ない。とりわけ20世紀後半から21紀にかけて複雑化した人の移動は、こうしたアイデンティティの問題をますます先鋭化させており、移民や出稼ぎ労働、国際結婚などによって多民族、多文化状況が急速に複雑化している現代の「複合社会」においては、理念としての国民国家は存在してもそれが十分に機能しておらず、不十分である〔合田 2009: 18〕。このような状況においては、アイデンティティ概念が必ずしも「内部の多様性の抑圧や個人の自由の剥奪」による国民国家の統治技術として働くとは限らず、むしろ、しばしば個人はいくつかの属性の中から自身の社会的、文化的文脈に応じてそれを自由に選択する。すなわちアイデンティティは固定されたものではなく「流動的、異種混濁的、相互交渉的」〔太田 2013: 254〕なものであるということをもとに検証し、そこから文化人類学におけるアイデンティティ論の有効性を確認することが本研究の目的である。

そこで本研究では、フィリピン北部ルソン社会における、先住民族女性と日系人¹⁾男性との間に生まれ先住民族社会で育った日系人のアイデンティティの変化・変容について扱う。ここで彼らに注目するのは、彼らが、急峻な山岳地帯に住むことから比較的最近まで「伝統的な」生活様式を維持してきたとされる人々であり、これまで文化人類学者たちによって、そこには「文化や言語等の違いから個々の集団と集団の間

にはっきりとした境界」があって、その成員は自身の「民族」集団ないしは自身の共同体に強いアイデンティティをもつと記述されてきた。しかし実際の彼らの社会は閉ざされたものではなく、歴史的に見れば、10世紀頃にはすでに交易によって外の社会との交流が頻繁にあり、さらに、植民地支配の結果、多くの外国人がこの地に流入することになって、ここに複雑な多民族、多文化状況が20世紀の初めに形成されたという事実による。こうした開かれた文化的に多様な世界において、先住民族が日系人をどのように受け入れ、そこでその子孫が自身のアイデンティティをいくつかの属性のなかから歴史的に社会的、文化的文脈に応じていかに選択してきたのかをここでは明らかにするが、その際、筆者は、アイデンティティは文化的に可能な広範囲から取捨選択された折中的な構築物であり、絶えず変化・変容するものである〔マクガイア 2008: 92、ホール 2001: 12〕ととらえることで、それがいかに「流動的、異種混血的、相互交渉的」であるかを検証する。

なお、本研究は、JSPS 科研費2352009による研究成果の一部であり、本稿で用いた一次資料は主として2011年から2013年にかけてフィリピンのバギオ市 (Baguio City) およびマウンテン州 (Mountain Province) で実施したフィールド調査によるものである。

1 北部ルソンの日系人

(1) 出稼ぎ労働者としての日系人

日比間の人の移動について見ると、最初にフィリピンに日本領事館が開設されたのは1888年であるが、大きな人の移動の流れは当時まだなく、翌年の1889年の在留日本人の数はわずかに35人、しかも、その多くが一時的な滞在者であった。

日本からフィリピンへの移住が活発になるのは、フィリピンの植民地宗主国がスペインからアメリカへと代わった1898年以降であり²⁾、とりわけ多数の日本人が来比する契機となったのは、ルソン島北部のラ・ウニオン州ロザリオ (Rosario, La Union Province) からベンゲット州バギオ (Baguio, Benguet Province) を結ぶ全長41.2kmのベンゲット道路の建設工事である (図1)〔橋谷 1985: 35-38、早瀬 1989a: 71-72〕。新たに植民地宗主国となったアメリカは、植民地開発の基礎として道路や鉄道、港などのインフラの整備に力をいれたが、その一つとしてこのベンゲット道路の工事計画があった。バギオはマニラから北に約200km、ルソン島北部のコルディリエラ山脈 (Cordillera Central Mountain Range) に位置する高原であるが、アメリカにとってこの道路の完成は、熱帯に位置するフィリピンの避暑地としてバギオを開発するのに必要であっただけでなく、植民地経営上、この地で産する金、銅などの鉱物

資源や工事用木材を確保するために、さらには大規模な工事を行うことでフィリピンの人々にアメリカの力を見せつけるためにも、きわめて重要な意味を持つものであった〔早瀬 1989b: 35-41〕。しかし当初の思惑とは異なり、急峻な山岳地帯での工事は難航し、予定していた見積期間や工費を大きく上回ることとなって責任者は2度解任され、その継続が危ぶまれた。その後、1903年にバギオを夏の首都とすることが決定されると、新たにケノン少佐 (Major Kennon) がベンゲット州全体の開発をすすめる総責任者に任命され、ベンゲット道路の工事もまた彼に委ねられることとなった。そこで彼は工事ルートの変更とやり直しを行い、その労働力不足を解消するために、これまでのフィリピン人やアメリカ人、白人、中国人労働者に加えて日本人労働者を導入することにした〔早瀬 1989b: 5、42-66、Reed 1999: 76-91〕。そこで日本の渡航会社と契約を結び移民労働者を募集したところ、多くの応募があり、1903年には第1陣の125人の移民がマニラに到着し、さらに翌年にかけて3,096人が送り込まれ、これに独力で渡った者を含めると、この2年間で約5,000人の日本人がバギオに向かったという〔入江 1981: 428、432〕。こうしたケノン少佐の大胆な改革もあって、ベン

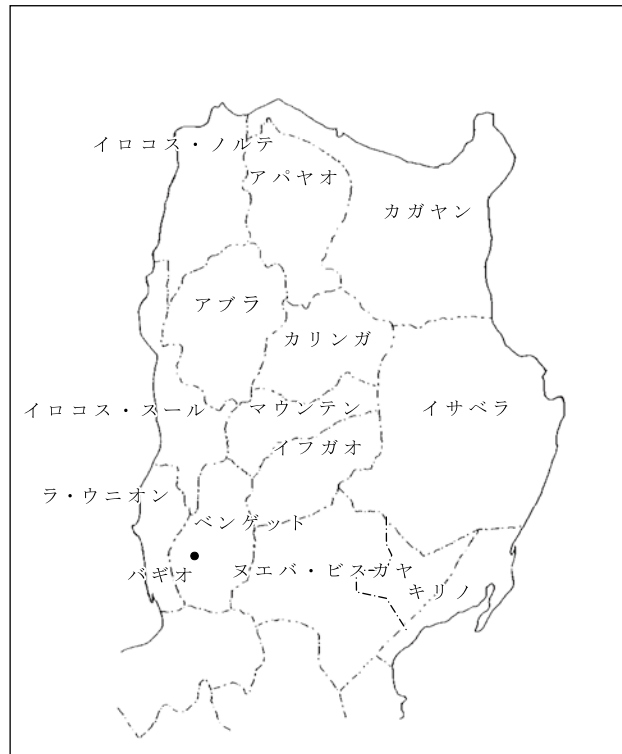


図1 北部ルソン地域

ゲット道路は1904年にほぼ完成し、1905年にはその開通式が行われた。

しかし現実には、これらのベンゲット道路建設のブームに乗って渡航した人々の大半がフィリピンに定着できず、すぐさま帰国したという〔橋谷 1985: 35-36〕。またベンゲット道路の完成によって、ほとんどの日系人労働者が失職し、やはりその多くが帰国した。残りはフィリピン各地に職を求めて散っていくこととなったが³⁾、道路完成後、フィリピンに定着できた者は大工や石工などの熟練労働者が大部分を占めており、その後、アメリカの軍宿舎建設や土木工事に従事するようになった〔前掲書: 37-38〕。

(2) 新たな移民の流れ

ベンゲット道路の開通後、バギオでは避暑地・保養地、夏の首都として多くの公共の建物やスポーツ施設が作られ、また周辺地域の鉱物資源の採掘や森林伐採などの開発も同時に進められた。いっぽうマニラの有力者たちがここに別荘用の土地を買い求め、観光客も増加した。そのためベンゲット道路建設のために来比した人々の中には、そのままバギオ周辺にとどまり大工や石工、製材工、測量技師、庭師などとしてアメリカ人に雇われ、住宅、ホテル、学校、公園、橋などの建設にかかわったり、鉱山や製材所で大工や技術者として雇われたりする者もいた⁴⁾。とりわけ日系人は、木造建築に慣れていたことに加え、アメリカ人の技術者が書いた設計図を正確に読み取りそれを建築物として形にする能力に優れており、また仕事が迅速で正確であったので、だんだんと安定した仕事を得ることができるようになっていったという〔Afable ed. 2004: 31-46〕。

こうしてバギオが都市として発展し日系人が活躍するようになると、今度は新たな日系移民が、初期の移民が同郷の若者を呼び寄せる形で次々とやって来るようになった。ただしフィリピンではベンゲット道路工事後、単純労働者の受け入れが厳しくなったため、新規移民のほとんどは土木労働者ではなく、大工やその他の熟練労働者であったという〔Afable ed. 2004: 31-32, Yu-Jose 1999: 12-14〕。やがてバギオでは、こうした日系人労働者や避暑に訪れる観光客をターゲットとする商業も発展していき、1910年代にはバザー (Bazar) や時計修理店、床屋、写真スタジオなど、多くの日系人の店がバギオの中心地のセッション・ロード (Session Road) で営業を始めるようになっていった⁵⁾。

いっぽうバギオの郊外では、製材工や大工などとして働く日系人たちの集落が形成されたが、やがて彼らは、仕事の傍らにそこで野菜を栽培して市場で売るようになり、さらに1910年代末にマニラへの野菜の供給ルートができあがりバギオ野菜の需要が高まると、今度は、より広い土地に移り住んでそこで大規模な農業経営を行い、それを主たる生業とするようになっていった〔Afable ed. 2004: 47-52〕。またバギオよ

り奥地の開発もだんだんと進められ、多くの日系人たちがマウンテン州やイフガオ州 (Ifugao Province)、カリंगा州 (Kalinga Province) といった地域に送られていった (図1)。

こうした日系人の増加にともない、1921年には会員間の親睦や相互扶助、情報提供などを目的としてバギオ日本人会が結成された。その事業の主たるものは日本人小学校の維持運営であり、小学校の尋常科が1925年に開校、当初は2クラス24人でスタートしたが、1929年には生徒数が約3倍になり、1933年には高等科もスタートしている [大谷編 1938: 496-502]。その後も日系人の数は増え続け、1938年のバギオ日本人会の会員数は320名にもものぼり、1939年にはバギオの人口24,000人に対し1,000人を超える日系人のコミュニティが形成されるまでに発展したという [Afable ed. 2004: 54-55]。

(3) 先住民族との婚姻と太平洋戦争

これらの移民たちの中には年齢的に高い者も少なくなく、また妻子を残して来比した者や、若くして単身で赴任した男性などさまざまであったが、さして日本に帰国したいという願望が強くなかった者も多く、そうした人々はこの地に住む先住民族の女性と結婚し、この地に定着した。バギオのあるベンゲット州はもともと北部ルソンの先住民族であるイバロイ族 (Ibaloy) が住む土地であり、同じベンゲット州にはカンカナイ族 (Kankanay)、隣接するマウンテン州にはボントック族 (Bontok) といった先住民族が暮らしていた。そのため、彼らが日系人と出会う機会も多く、先のベンゲット道路工事では荷役として多くの先住民族が雇われていたため⁶⁾、そこで先住民族の若い女性と知り合って結婚した人も多くいたようである [金ヶ江 1968: 690]。やがて、バギオ郊外で大規模な農業経営が行われるようになると、そこでも多くの先住民族が雇用されるようになり、またバギオの開発が進むにつれ、さまざまな場所で橋や道路の建設が行われるようになると、今度は、多くの先住民族の女性がそこで働いている日系人相手に商売をしようと遠くの村からやって来るようになった。とりわけ日系人の農園ではイバロイ族やカンカナイ族、ボントック族の男女が多数仕事を求めて村から下りて来ており、ここで出会った女性と結婚する男性も多かった [三吉 1942: 32-33、Afable ed. 2004: 47-48]。こうした先住民族の女性と日系人の夫との関係は比較的良好であったようで、もちろんそうでないケースもあったに違いないが、概して女性たちは「夫が作った野菜を毎朝早くから頭に乘せてバギオの市場に運ぶ」など、とてもよく働き、また女たちは「日本の農家の夫人と少しも異なるところがなく、夫婦間にいざござがおきたという例は、かつて一度も聞いたことがなかった」し [金ヶ江 1968: 691]、日系人の夫も日本人の妻と変わらない敬意をもって彼女たちに

接していたという〔Hamada 1983: 22〕。

しかし、こうしたバギオでの安定した生活も長くは続かず、1941年12月8日の日本の真珠湾攻撃からわずか5時間後には日本の爆撃機がバギオ郊外の米軍基地に攻撃をしかけ、この地の日系人たちもまた太平洋戦争に巻き込まれていった。アメリカ軍は、すぐにバギオ周辺に住むすべての日系人の拘留を決めたが、この時、先住民族と結婚した多くの人々は親族や近隣の人々にかくまわれ拘束されずに済んだという。しかしその拘留も長くは続かず、やがて日本軍がバギオを占領すると、日系人たちは以前と同じように商売や農業を続けることができるようになった。しかし、日本語ができる1世や2世は憲兵隊の通訳や現地の案内に駆り出され〔郡司 1993、Afable ed. 2004: 293-294〕、さらに、戦局がだんだんと悪化していくと今度は徴兵が彼らにも課されるようになり、軍人や軍属として戦闘への参加を余儀なくされた。結局、1945年4月にバギオはアメリカ軍の手に落ち、日系人たちは家を捨て日本軍とともに山岳地帯に逃げ込むが、敗走していくなか退路は断たれ食糧もなく、そこで多くの人たちが栄養失調や病気で命を落としていったという〔大野 1991: 52-88、鴨野 2003: 222-23〕。やがて終戦を迎え日系人たちは日本に強制送還されるが、夫や父と別れフィリピンに残留した先住民族の妻やその子供たちは⁷⁾、戦後の強い反日感情のなかで日本軍の非道な行為に苦しめられたフィリピン人の報復を恐れ、日系人の夫や父親との関係を隠して生きなければならなかった。そのため日系人としての「アイデンティティ隠し」が広範に行われたという〔Afable ed. 2004: 294、飯島・大野 2010: 37〕。

2 「先住民族」としての日系人

(1) 日系人としてのアイデンティティ

戦後、フィリピンに残留した日系人が「日系人」としてのアイデンティティを隠し、「フィリピン人」として生きなければならなかったことはすでに述べたが、戦前の日系人社会のなかで、こうした人々はどのようにその「日系人」としてのアイデンティティを構築してきたのであろうか。

バギオにある北ルソン比日友好協会の調べでは、バギオおよびその周辺のベンゲット州、マウンテン州のサガダ・ポントック地域 (Sagada-Bontoc Area)、イフガオ州キアンガン (Kiangang) およびカリంగా州のルブアガン (Lubuagan) において (図2)、115名の日系人が現地の先住民族と結婚しその子孫をフィリピンに残したことが判明している〔Afable ed. 2004: xxiv〕。こうした戦前の日系人とその家族の生活を見てみると、その多くが、たとえ妻が先住民族であっても子供たちには日本の名前を付け、味噌や醤油、豆腐、海苔、梅干し、おにぎりなどといった日本の食べ物を

食べ、酒を飲み、箸を使い、草履や下駄を履き、着物を着、畳を敷いて生活し、風呂に入り、日本の年中行事を祝っていたようである。しかし、そのいっぽうで夫婦の会話に北部ルソン地域一帯のリング・フランカであるイロカノ語が使われたり、妻やその親族によって伝統的な儀礼が頻繁に行われたりもしていた〔Afable ed. 2004〕。このように、日系人コミュニティでは日本の文化を持ち込むとともに、先住民族の文化も柔軟に取り入れて生活していたことがわかる。

いっぽう彼らは教育にも熱心で、三吉によると、バギオ近郊の日系人農園が集まるトリニダッド（Trinidad）では「日農78戸の中20余戸の農夫はナバロイ土人（イバロイ族※筆者注）を妻とし、その間に数10人の子供が生れ、数軒（km※筆者注）の所にあるバギオの日本小学校に通学させ日本式の教育を授けて」いたという〔三吉1942: 32-33〕。バギオ日本人学校の元教師たちの回想にも、しばしば児童たちのなかに先住民族と日系人との「混血児」が多かったことがあげられているが、そこでは彼らに対する差別はほとんどなかったらしい。しかしそのいっぽうで、「その頃は、外地なので大和魂を子供達に芯から深く植え込むことが第一」であり、内地以上にこの意気込みを以て教育に臨んだが、特に「混血の方が多かったので、何としてでも大和魂をもって立派な日本人に仕立てるのが私たちの義務であると思い」、彼らを「本当の日本人」にしようと厳しく指導し、こうした日本精神の同化教育が、「純粹の日本人のほうが混血よりも一段高いという父兄の間にあった偏見を除くのに寄与した」とも述べられている〔小島 1993: 87〕。

もちろん、バギオやその周辺の日系人家族の生業形態や経済状況によって、こうした「日系人としての暮らし」に程度の差があることはいうまでもないが、2世の日系人としてのアイデンティティの構築にこれらの日本的な暮らしや教育が大きく寄与していたことは否めないであろう。

（2）先住民族社会に生きる日系人

ベンゲット道路完成後に残った、あるいはその後やって来た熟練の労働者たちの雇い主は、植民地政府や宣教のためにやってきたキリスト教関係者などさまざまであったが、1908年にアメリカによってバギオ周辺のコルディリェラ山脈地域一帯がベンゲット、アンブラヤン（Ambrayan）、レバント（Lepanto）、ポントック、カリンガ、アパヤオ（Apayao）、イフガオの7つを亜州とするマウンテン州⁸⁾（以下旧マウンテン州）に画定されると、今度は、その州都となったポントック⁹⁾（図2）の開発がこうした雇い主たちによって進められることとなった。ポントックは州都としてだけでなく、米国聖公会やカトリック教会の伝道活動の北部ルソンの拠点ともなっ

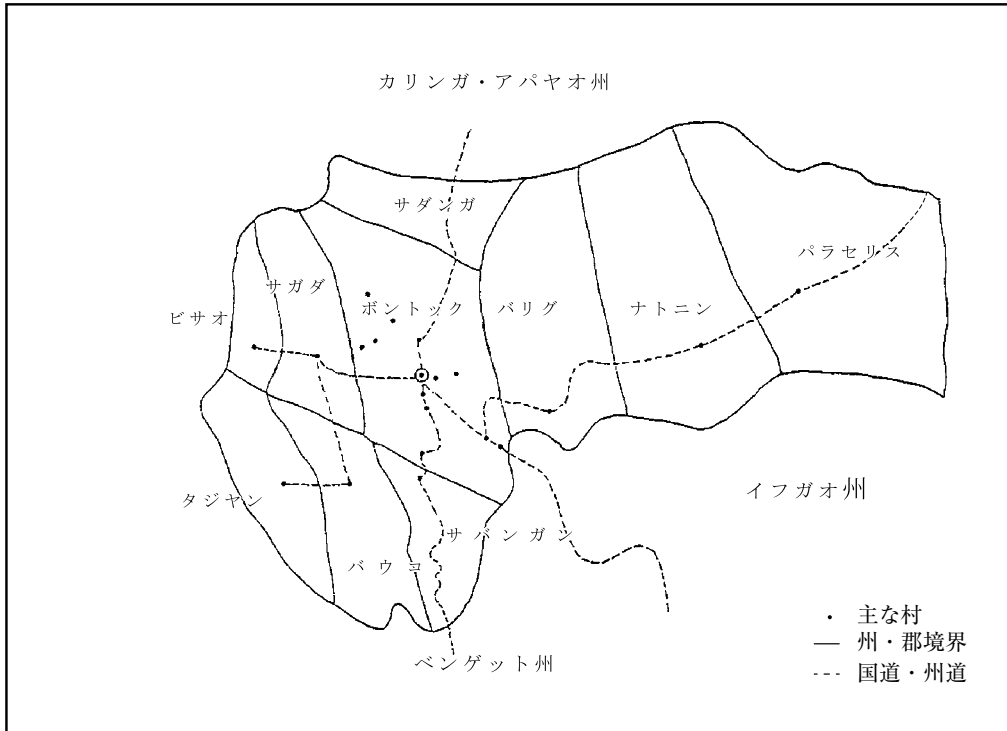


図2 マウンテン州全図

たため、先に述べたように、ポントックやその近隣の地域に多くの日系人が1903年～1910年頃にかけて派遣されている。

そこでは、州庁舎・道路・橋などといった公共施設や学校・寄宿舎・教会などの建物が新たに作られたが、そのためにポントックにも多くの日系人の大工や石工、土木作業員などがやってくるようになり、そこに小さな日系人コミュニティが形成され、やがてこれらの人々を目当てに日本の食料品などを扱う商店（足達商店: Bontoc Bazar）や写真スタジオなどができるまでになった〔Afable ed. 2004: 133-163〕。1937年にこの地を探検・調査した三吉朋十は、ポントックは「今尚お往々首狩りの蕃風を有し靈魂崇拜の非基督教徒でルソン島の先住民族である」イゴロット族という「蕃人」が住み「スペイン領有時代には理外の蕃界として放置された所」であったが、「米領となってからは、此処はルソン島中央部を十字に結ぶ要地に当たるを以てその重要性に鑑み、ここに州庁を設け又、刑務所、病院、兵舎等をも設け、今日ではバギオ市以北では此処が最も繁華の町となって」おり、「此処に足達商店があり数名の邦人がいる。（中略）他に数名の邦人がいて写真、土木業を営んでいる」と報告している〔三吉 1942: 34-35〕。またポントックの古老たちの間でも、当時の日系人たちの名

前が未だに記憶されている。しかも、彼らのなかにはポントック族やカンカナイ族の女性と結婚して家庭を持ちここに根付いた者が多く、1936年頃の調べでは、ポントック付近だけでこうした先住民族女性との間に生まれた子供が48人いたという〔金ヶ江：1968: 693〕。

しかしこれらの地域は、バギオと違い、子どもたちを日本人学校へ通わせるのは困難であり、また日本の物もなかなか手に入らない。そのような状況において、彼らは「日系人としての暮らし」をどのように営んでいたのでしょうか。現在、ポントックの町（Bontoc Poblacion）に住んでいる日系人2世はO氏（日本名：Shizue）だけであるが、もちろん、それ以外にも多くの日系人がこの地でかつて暮らしていたことは現地の人々の記憶にも残っており、また日本側の資料からも読み取ることができる。たとえば1936年より1940年まで発行された『比律賓年鑑』（田中印刷出版）に掲載された「在留邦人名選」のポントックおよびその周辺の旧マウンテン州に居住していた日系人に関する記録によると、

『比律賓年鑑（昭和十二年度版）』（1936年発行）

① 奥井儀一：広島県出身

1905年来比、旧マウンテン州サガダ在住

② 足達眞鈴：大分県出身

1910年来比、旧マウンテン州ポントック在住

食料品・織物・雑貨商、足達商店主

ポントック在留日本人総代、ポントック日本人会会長

在比家族：長女の夫（養子）、長女

『比律賓年鑑（昭和十三年度版）』（1937年発行）

① 奥井儀一（前出）

② 出来畷一：鹿児島県出身

1911年来比、旧マウンテン州ポントック在住

建築請負業

ポントック日本人会幹事

在比家族：妻エレナ（サガダ出身）、エレサ（長女）、ソレキ（長男）

③ 足達眞鈴（前出）

また、同年鑑に掲載されている、市木原次太郎による「北部呂宋を旅して」には、この地の日本人についての記述があり、それによるとポントックには「二十有餘年来同地に雑貨商を営んでいる安達君、土木請負をやっている出来君のほかに、写真屋をやっている人等五六名丈であるが、誰も同地官憲にも

知り合い多く吾が経済的発展及日比親善関係の増進に貢献」しているとある。いっぽうサガダ（図2）でも「三十前から土木請負等として居る奥井君と山下某の二邦人があり、未だかつて一度も日本に帰ったことがない由であるが、長い間在留しているため部落民等、誰一人知らぬものなく彼等のよき相談相手となっているらしい」という〔木原 1937: 81-82〕。

『比律賓年鑑（昭和十四年度版）』（1938年発行）

- ① 奥井儀一（前出）
- ② 出来畷一（前出）
- ③ 足達眞鈴（前出）

『比律賓年鑑（昭和十五年度版）』（1939年発行）

- ① 大城昌康：沖縄県出身
1933年来比、旧マウンテン州ポントック在住
ポントックバザー、雑貨商
在比家族：妻、長男、長女
- ② 小寺章¹⁰⁾：岡山県出身
1939年来比、旧マウンテン州ポントック在住
足達商店店員
- ③ 出来畷一（前出）
- ④ 足達眞鈴（前出）
- ⑤ 天野芳一：和歌山県出身
1937年来比、カリంగా亜州ルブアガン在住
大工職

『比律賓年鑑（昭和十六年度版）』（1940年発行）

- ① 大城昌康（前出）
- ② 奥井儀一（前出）
- ③ 政所貞：愛媛県出身
1931年来比、イフガオ亜州キアガン在住
イフガオバザー店主、ポントック日本人会役員
- ④ 小寺章（前出）
- ⑤ 出来畷一（前出）
- ⑥ 足達眞鈴（前出）

また、同年鑑の「山岳州（旧マウンテン州※筆者注）奥地」の在比邦人実業家一覧に、上述の政所貞、足達眞鈴、大城昌康の他、坂本濱太郎（バザー：イフ

ガオ亜州キアンガン在住)、水野虎蔵 (バザー: イフガオ亜州キアンガン在住)、東泰三 (バザー: カリंगा亜州ルプアガン在住)、深澤友義 (バザー: 旧マウンテン州バウコ Bauko 在住)、椿数重 (バザー: イフガオ亜州キアンガン在住) の名があげられている。

しかし、これらの年鑑に名前があげられている日系人はバギオ日本人会の会員のみであると推測され、その多くは、ある程度経済的に余裕があった者たちであって、実際にこの地に滞在したすべての日系人がそこに掲載されているわけではない。また、建築請負による一時的な滞在も多いため、ポントック周辺の日系人は、現地の女性と結婚して定住した者を除いては概して流動性が高かったと考えられる。

(3) 先住民族社会に生きる日系人の語り

日系人が当時、建設にかかわった建物や橋はその後、建替えられたり、焼失したりしたが、今でもその痕跡をあちこちに見ることができる。しかし今では、それが日系人の手によるものだと知る者や、かつてたくさんの日系人がここに住んでいたことを知る者は少ない。

彼らのうち Higashi (東)、Okui (奥井)、Takahashi (高橋)、Uda (宇田)、Yamashita (山下)、Yoshikawa (吉川) といった日系人は、ベンゲット道路の工事に携わるため、ないしは同時期に来比した人々で、マニラやバギオで大工や石工などとして働いた後、バギオで米国聖公会やカトリック教会の伝道師たち、あるいはアメリカの植民地行政官と出会い、そこで教会や州庁舎、学校、橋、病院、市場などの公共施設の建築に携わる契約をしたのではないかと推測される。先に述べたように、ポントック周辺には商業目的で滞在した日系人もいたが、これらの人々は主に1930年代にやって来た人で、日本人の妻をもつものが多かった。これに対し、前述の日系人のように、比較的早い時期に熟練労働者としてこの地にやって来た人のほとんどは、現地の先住民族の女性と結婚している [Afable ed. 2004: 133]。そして彼らの子孫の多くが今もバギオやポントック、サガダ周辺に住んでいる。

このうち、先述の、現在もポントックの町に住む日系2世の〇氏は、父直次郎について次のように語る。

直次郎がフィリピンへやってきたのは1904年、16歳の時で、何人かの若者たちといっしょに新天地を求めてフィリピンへ渡った。マニラで大工として雇われ最初はミンダナオ島に行くが、1907年にバギオに移り、そこでさまざまな施設の建設に携わった。彼は腕のいい熟練の大工であったようで、その腕を活かしてさまざまな

仕事をすることができたが、1911年に旧マウンテン州の州庁舎建設の現場監督として雇われ、その後も、ポントックやその周辺地域で病院や市場などの公共施設の建築や橋・水道・発電設備などといったインフラの整備に責任者として携わった。こうした直次郎の生涯のなかで一番思い出深い出来事は、1921年に、ポントックから12kmほど離れたマリテプ溪谷 (Malitep Valley) にかける橋の工事に従事していた時、その妻となるポントック族の女性と出会ったことである。彼女は近くの村 (バリリ Balili) に住んでいて、工事現場の側の水田で農作業をしていたところを彼が見かけて一目ぼれした。そこで一緒に働いていたポントック族の男性が女性に求婚するポントックの伝統的な方法を彼に教え、それを試みたが、彼女の両親は彼が外国人でありことが通じないこと、彼女は一人娘で親の勧めですでに婚約していたことなどを理由に結婚に猛反対した。彼はポントックで彼女の両親と何度も話し合ったが、最終的には、彼の娘に対する強い思いを知り、またポントック族の仲間が積極的に支援してくれたこともあって結婚が許された。直次郎の両親もこれに快く従いその年の12月に結婚したが、しばらく子どもが生まれなかったため、シャーマンによる儀礼が行われ、その結果、2人の娘を儲けることができたという。また、彼が病気になった時もシャーマンによる儀礼が行われたが、実は彼の義理の母 (妻の母) は村の有力なシャーマンであって、彼女がたまたまポントックにやって来た時に、彼が病気だと知るとすぐにやって来て治病儀礼を始めた。その際彼は、義理の母が突然日本語を話し始めたのでびっくりしたが、椅子に座って日本語で彼女と話をすると急に気分が良くなり病気が治った。そこにいたのは日本にいる母の魂であり、俄かには信じられなかったが、彼はそれを受け入れることにした。それからというもの彼はポントック族の慣習や伝統を尊重するようになったという。

その他、現在もカリంగా州のルプアガンにその子孫が住んでいる Ando (安藤) 氏は、カトリック教会とその関連施設の建設のために大工として雇われ、1920年までポントックに滞在しそこでポントック族の女性と出会って結婚したが、その後、カリంగా州で同様の仕事に携わるために一家で移住している。また、大工の出来氏、高橋氏、宇多氏も同じように現地の先住民族の女性と結婚している。これらの日系人たちのなかには、先の『比律賓年鑑』に名前があがっていない者も多いが、先にも述べたように、ポントックには当時、小さな日系人コミュニティが安達氏の経営する安達商店を中心に形成されており、日系人同士の交流があった。安達氏は、ポントック在留の日本人総代であるとともにポントック日本人会の会長でもあり、よく他の日系人たちの面倒を見ていたようで、日系人たちは一日の仕事の終わりに彼の店に集まってお

しゃべりをしたり、ゲームをしたりして楽しんだという。また安達氏の助力でもってポントックやカリंगा亜州、イフガオ亜州などにバザーを經營するようになった日系人も多くいた〔Afable ed. 2004: 136〕。しかし、これらの日系人のうち安達氏や安達氏の元従業員であった大城氏（前出）、イフガオ亜州でバザーを經營した水野氏（前出）などの妻はすべて日本人で、建築労働者としてやって来た日系人とはその生活スタイルも少し異なっていたようである。またポントックには、Yamane（山根）氏の写真スタジオもあった。彼は当初、農業を目的に1911年来比し、バギオで現地の女性と出会い結婚したが、やがて旧マウンテン州政庁が写真家を募集していることを知り、ポントックへ行くことにしたという。彼は、他にも多くの日系人がポントックにいることを知って大変喜んだそうで、写真家として現地の多くの貴重な記録を残すとともに、これら日系人の家族写真もたくさん撮影していたと思われるが、残念ながらそのほとんどが戦火で失われ、今ではほとんど残っていない。

いっぽう州都ポントックに隣接するサガダ（図2）でも、ポントックと同じく多くの日系人が滞在していた。サガダでは米国聖公会による教会建設が早くからすすめられたが、その中心的な役割を果たしたのが山下氏である。山下氏は1902年来比し、ベンゲット道路の建設に参加した後、イフガオ亜州のキアンガンで教会や庁舎の建設に携わったが、それが終わると今度はサガダに移住し、ここでも教会や学校、寄宿舎、織物工場などさまざまな施設の建築にかかわった（写真1）¹¹⁾。そして、ここで知り合ったサガダの女性と1917年に結婚している。サガダには他にも何人かの日系人がいたが、そのうち奥井氏と吉川氏がこの地に長くとどまったようで、吉川氏はビサオ（Besao）（図2）で教会の建設に携わっているときにポントック族の女性と出会い、1913年に結婚、1932年に亡くなるが、奥井氏はその未亡人の女性と結婚している。また、これらのサガダに住む日系人はポントックに頻繁に出かけ、ポントックの日系人たちとも交流していたようで、それぞれの子孫の記憶や写真にその様子を伺い知ることができる。

バギオと同じように、北部ルソンの開発が進むにつれ、ポントックの周辺地域にも多くの日系人がやって来るようになり、やがて彼らを目当てとするバザーがいくつもできるようになった。これらのバザーの先駆けは1916年創立の安達商店¹²⁾であるが、こうした小売商を営むために資本金を携えてやって来た日系人たちだけでなく、もともと熟練労働者としてこの地にやって来た人々もまた先住民族の妻とともに小さな商売をするようになっていく。たとえば前述の出来氏は、1918年ごろにポントックに道路や橋の建設に携わるためにやってきたのだが、ポントックでは豆腐やうどんを作って売っていたことが人々の間でも記憶されている。奥井氏もまた、最初はサガダの製材所で働いていたが、後に手広く商売をするようになり、煎餅や豆腐などを作って

写真 1 山下氏が教会建設に携わる様子



(カレンダー写真より転載)

売ったり、日本から牛蒡の種を持ってきて植えたりした。また家具を作ったり、工具を扱う商店を営んだりして財を成したという〔A fable ed. 2004 : 144-145〕。

以上、見てきたように、これら日系人の多くは小売商を営むことを目的にこの地にやって来た者たちを除き、その多くが現地の女性と結婚し、そこで勤勉に働き、この地に根付いていったことがわかる。もちろん日系人のコミュニティを作り、日本の商品を持ち込み、子供には日本人名をつけるなどといったことも行われたが、子供たちを日本人学校に行かせることはほとんどなく、熟練労働者たちも現地の人々とともに働き、また自分たちの技術を彼らに惜しみなく教えた。また、彼らの伝統的な文化を尊重し、自ら儀礼を実修したり、それに参加したりと、日系人と先住民族の人々との間には比較的良好な関係が築かれていたと推察される。

しかしバギオから遠く離れたポントックにおいても、やがて日系人達は、バギオと同じように太平洋戦争に巻き込まれていく。日本軍が最初にポントックに現れたのは1942年の2月のことであるが、この時にはいくつかの家屋を焼き払っただけですぐに立ち去っている。しかし、再び6月に今度は多くの日本兵がやって来て、州庁舎や教会関係の施設を占拠し、ここに駐屯した。そこでは、日本兵の監視のもとにポントック族にも日本語や日本の文化が教えられ、日本の習慣に従うことが強制され

た。しかし、だんだんと抗日ゲリラの活動が活発になり、人々は次第に、日本軍に協力するフィリピン人を次々に虐殺する抗日ゲリラと、ゲリラに加担するフィリピン人を捉えようとする日本兵とのあいだで恐怖に怯えて暮らさなければならなくなっていく。やがて、多くの日本兵がボントックにいることを知ったアメリカが1944年3月にボントックを絨毯爆撃し、それによってボントックは廃墟と化し、多くの人々が焼け出された。そしてその後約1年間、日系人たちは山での避難生活を余儀なくされた〔Chaokas 2012: 31-34〕。

その間のボントックとその周辺の日系人たちについて見ると、安達は日本に帰国、山下氏はすでに1938年に死去していたが、山根氏は旧マウンテン州の日本企業の銅山の通訳として徴用され1945年に病死、相原氏は同じく銅山に技術者件通訳として徴用され戦後、強制送還など、その経験はさまざまであったが、いずれにせよかつて日系人が建築した建物も、日系人が成した財もそのほとんどがこの戦争で失われてしまった。

おわりに

北部ルソンに古くから住む先住の人々は、文化人類学者によってその文化や言語等の違いから、イバロイ族やカンカナイ族、ボントック族などといったいくつかの民族グループに分類される。しかし、20世紀の初めから1930年代にかけて、よりよい生活を求めて、あるいは海外での成功を求めてルソン島の北部へ渡っていった日系人たちにとっては、彼らが「～族」であるかにはほとんど関心がなく、単に彼らは、自分たちと異なる「他者 (Other)」としての「イゴロット *Igorot*」に過ぎなかった。イゴロットとは、かつてフィリピンを植民地支配したスペインが自分たち「文明化された社会」とは異なる「エキゾチックな他者」として彼らを包括した造語であり、そこには幾分、差別的な意味合いが含まれている〔Scott 1969: 154-172〕。すなわち北部ルソンは、はるか昔から「蕃人」の先住民族がすむ「未開」の地であり、そこには「文明の風の吹かない先住原始の蕃人部落」があり、その「蕃人」たちの大部分は手に槍を持ち、ただ一片の布を腰に纏い、自然を崇拜していた〔中屋 1942: 222-223〕。

しかしそのいっぽうで、日系人たちにとって彼らはこの地で生きていく上での重要なパートナーであり、とりわけ先住民族と結婚した日系人にとっては家族であり、親族であり、親しい近隣者でもあった。同時に、先住民族にとっての日系人は「他者」として排除すべき異質な存在ではなく、歴史的に開かれた文化的に多様な世界において、戸惑いながらもこれらの人々を柔軟に受け入れてきたことが日系人や先住民族の語りからも読み取れる。そして、日系人もまた先住民族社会の一員として彼らの文化

を理解し、受け入れようと努力し、その生活の基盤を築いていった。しかし日本の敗戦によって、その基盤が失われただけでなく、その後も激しい反日感情に晒され続けたために日系人としての「アイデンティティ隠し」が行われ、その子孫である人たちが「日系人であること」がだんだんと人々から忘れられていく。しかし、1960年代から80年代にかけて反日感情が次第に薄れていくと、今度は、困難な生活を戦後強いられた日系2世が中心となって、相互扶助や日本に支援を求める日系人会を各地で組織するようになっていく。さらに1992年にはフィリピン日系人会連合会（The Federation of Nikkei-Jin Kai Philippines）という全国組織も結成され、これによって「フィリピン全土の日系人の受難体験が相互認識され、「フィリピン日系人」というアイデンティティが共有化」されることになっていったという〔大野 2007: 85-86〕。

バギオでも1970年代に日系人探しが始まり、これによって多くの日系人が「発見」された。1972年にはバギオの日系人による最初の会合が持たれ、そこからさまざまな活動がスタートしている。もちろんバギオやその周辺に住んで日本人学校に通い、日系人社会のなかで「日本人」として育った先住民族を母に持つ2世と、先住民族社会で育った2世には戦中や戦後の経験において大きな隔りがあるだろう。先のサガダの山下氏の息子H氏は今でも山下姓を名乗るが、バギオに出る子どもにはサガダの妻の姓を名乗らせたという。しかし、彼もポントックのO氏も戦後、財産を没収されたり、日系人だということで差別されたりしたことはあったが、概して、彼らの生活はバギオの日系人や他の地域の人々の経験と比べ〔cf. 大野 1991、鴨野 2003、鈴木 1997〕、さほど困難ではなかったように見受けられる。むしろ彼らの語りで強調されるのは、いかに日系人として迫害を受けたかではなく、さまざまな戦後の逆境を日系人としていかに乗り越え、成功したかであった。

しかしポントックやサガダに住む先住民族にとっては、2世であるO氏もH氏も「日本人」であり、戦後生まれの3世、4世までもが「日本人」である。ただし、それと同様に中国系の2世や3世、4世も「中国人」であって、そこに「日本人や中国人の祖先がいる」ということ以外に何らかの他意があるとは思われない。また、彼らのこの地での生活様式を見ても他の人々と何ら変わることはなく、彼らの日系人としてのアイデンティティは周囲の「他者からのラベリング」によるものに過ぎないことがわかる。彼ら自身も、子どもや孫に日本人名をつけたり、日本人の姓を名乗ったりすることに「日系人であること」を表象するのみであって、これとは別に、自分たちは「～族である」と認識している。このような状況において、彼ら日系人が日常的に自身の「日系人としてのアイデンティティ」を意識することは少ないといえる。

しかし、バギオにおける日系人会の活動がポントックの日系人にも広がっていくにつれ、今度は、その支援を受ける上での重要なファクターとしてそのアイデンティティが再確認されるようになっていく。とりわけ1990年に改正出入国法が施行され日系2世、3世とその家族が日本で職種制限なく仕事をできるようになると、「日系人であること」を法的に証明することが彼らにとってきわめて重要な問題となり、かつて日系人を差別、抑圧した人々のまなざしもまた、日本への出稼ぎで潤う日系人への羨望へと大きく変わっていく。

以上のことから、日本からの出稼ぎ労働者が、フィリピンという異国の地で現地の人々と出会い、そこで現地女性を母親とする「複数の属性」を持つ多くの日系人を生み出したが、これらの2世たちは歴史に翻弄されながらも、いくつかの属性のなかから自身の社会的、文化的文脈に応じてそのアイデンティティを選択し、変容させてきたことがわかる。とりわけ、差別や迫害の比較的少なかった先住民族社会に定着した日系人2世には「日本人」としての教育を受けていない者も多く、日本人の父親を失った後も「日本人としての暮らし」がずっと維持されてきたとは思えない。そのため、これまで日常的に日系人としてのアイデンティティが意識されることは少なかったと考えられる。しかし彼らもまた、日系人会が組織されたことによってフィリピン全土の日系人の受難体験を相互認識し「フィリピン日系人」というアイデンティティを共有化するようになり、さらには日系人として日本への出稼ぎが可能となると、そのアイデンティティがより鮮明化されていく。

現在バギオでは、すでに日系5世が誕生しており、北ルソン比日友好協会の調べでは2012年9月現在、北部ルソンに903名の3世、340名の4世、12名の5世が確認されている。しかし現出入国法では4世、5世は日本へ出稼ぎに行くことができない。また日本人として日本人学校で教育を受けた現地女性を母親とする日系2世の多くがすでに亡くなっており、こうした状況において日系人としてのアイデンティティもまた今後、歴史の流れのなかで変容されていくに違いない。

<注>

- 1) ここでいう日系人とは、公益財団法人海外日系人協会による定義「日本から海外に本拠地を移し、永住の目的を持って生活している日本人ならびにその子孫の2世、3世、4世などの人々が国籍、混血は問わない」(<http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html>, 2013年12月25日アクセス)による。ただし、戦前フィリピンに渡った日系人の多くは永住というよりも出稼ぎ労働を主な目的としていた。しかし現地の女性と結婚、あるいは太平洋戦争によって家族が離散したことで期せずしてフィリピンに永住することとなった日系人の子孫も多いことから、ここでは「戦前にフィリピンへ渡った日本人ならびにその子孫」という意味で「日系人」という用語を用いることとする。

- 2) しかしアメリカは当時、契約移民の入国を禁止しており、それがフィリピンにも適用されていたため、フィリピンに正式に入国するためには、自由移民であり、かつ熟練労働者でなければならなかった。そのために、1902年までの渡航者の数は、実際には100人余りに過ぎなかった〔鈴木 1992: 183-186〕。
- 3) ベンゲット道路完成による失業移民の救済策として、1904年から南部ミンダナオ島ダバオの麻農園への入植が始まるが、その後、第一次大戦による麻価格の高騰によって日系人農園の開設が相次ぎ、これによって新たに日本から渡航する人が増え、日系人の農林業人口が増加した〔橋谷 1985: 38-40〕。
- 4) 日系人を雇用したのは、主に植民地政府や宣教にやってきたキリスト教関係者、カントリー・クラブのような民間団体などさまざまで、日系人はマンション・ハウス (Mansion House: 現在の夏の大統領官邸) やパインズ・ホテル (Pines Hotel)、市庁舎の庭園、米軍保養施設キャンプ・ジョン・ヘイ (Camp John Hey) の円形劇場などといったバギオ有数の建築物の建設にもかかわっている。いっぽう当時、鉱山で働いていた労働者の中にも日系人は多く、12,000人の労働者のうち160人~200人を占め、そこで大工や鉱山の監督、技術者として働いていたという。さらに、鉱山の新設によって木材の需要が高まるにつれ製材会社でも日系人が働くようになり、とりわけヘアルド製材会社 (Heald Lumber Company) では1910年~1941年にかけて、たくさんの日系人が製材工や技術者として働いていたという〔Afile ed. 2004: 52-53〕。
- 5) 日系人の商業人口は1910年代と1930年代に増加するが、特に1920年代に入ると日系人のフィリピンへの進出は資源、市場に主眼をおく傾向を強めていく。その結果、大商社、貿易商が日本商品を輸入し、それを小売商が市場に販売していくという構造が1920年代に完成するが、実際の個々の経営は小規模で独立していた〔橋谷 1985: 51〕。
- 6) ベンゲット道路の工事ではピーク時で約4,000人の労働者が働いており、彼らを賄うのには毎日約60トンの食糧が必要であった。そのため、多くの先住民族がその荷役として雇われていたという〔Tapang Jr. 1985: 36〕。
- 7) フィリピン人を母とする子は原則として「15歳以上の男性は父親とともに強制送還、15歳以上の女性は日本に行くかフィリピンに残留するか選択、15歳未満の子は父親が連れて帰る場合を除き全員フィリピンに残る」と定められていたようである。しかし実際には、フィリピンに残された2世たちの多くは終戦時、母や兄弟姉妹、妻子とともに山に避難していたか、軍属や通訳として父や母、兄弟と離れ単独行動となっていたかで父親と死別または離別していたため、強制送還される父親の帰国の場面に立ち会った者は少ない。そのため、たとえ15歳未満であっても日本に連れて帰る父がいない、あるいは15歳以上の男性であってもフィリピン人の母親や妻を残していくことができずに残留したという日系人も多かった〔東京財団 2005: 31-32〕。
- 8) 北部ルソンでは行政の単位である州が何度か改編されているが、1908年にアメリカによって制定されたマウンテン州は、その後1966年にマウンテン、ベンゲット、カリंगा・アパヤオ、イフガオの4州に分割され、さらに1995年にはカリंगा・アパヤオが2つの独立した州として分離した〔森谷 2004: 27-30〕。
- 9) 1930年にバギオとポントックを結ぶ全長約150kmのハルセマ道路 (Halsema Road) が完成するまでは、ポントックへは、急峻な山岳地帯の馬車道や先住民族の踏み分け道を何日もかけて馬車や徒歩で移動しなければならなかった〔Bagamaspad and Hamada 1985: 237-240, Jenks 1905: 31-32〕。
- 10) 小寺章は、1939年に南洋協会の商業実習生としてフィリピンへ派遣され、ポントックの安達商店で働いていたが、その後1942年から1944年までバギオの日本人学校で代用教員をした〔小島 1993: 78〕。
- 11) 教会が、サガダでの布教開始100周年を記念して作成したカレンダーに山下氏の写真が掲載されており (本文の写真1)、その正面に立っているのは山下氏である。
- 12) 詳細は不明だが、安達商店は「皆川商店」の後を継いだものらしく、三吉の報告に、安達商店主は「皆川

商店の後ろを襲いで雑貨を営み信用敦く、皆川商店は、パラワン島に移り商業を営んでいる」とある〔三吉 1942: 35〕。

<参考文献>

入江寅治

1981『邦人海外発展史 上・下』原書房復刻版。

上野千鶴子

2005『脱アイデンティティ』勁草書房。

太田好信

2013「アイデンティティ論の歴史化」『文化人類学』78-2: 264。

大谷純一編

1936『比律賓年鑑（昭和十二年度版）』田中印刷出版。

1937『比律賓年鑑（昭和十三年度版）』田中印刷出版。

1938『比律賓年鑑（昭和十四年度版）』田中印刷出版。

1939『比律賓年鑑（昭和十五年度版）』田中印刷出版。

1940『比律賓年鑑（昭和十六年度版）』田中印刷出版。

飯島真理子・大野俊

2010「フィリピン日系「帰還」移民の生活・市民権・アイデンティティ：質問票による全国実態調査結果（概要）を中心に」『九州大学アジア総合政策センター紀要』4：35-54。

大野俊

1991『ハポニーフィリピン日系人の長い戦後』第三書館。

2007「フィリピン日系人の市民権とアイデンティティの変遷—戦前期の二世誕生から近年の日本国籍「回復」運動まで—」『移民研究年報』13: 79-98。

金ヶ江清太郎

1968『歩いてきた道—ヒリッピン物語—』国政社。

鴨野守

2003『バギオの虹』アートヴィレッジ。

木原次太郎

1937「北部呂宋を旅して」大谷純一編『比律賓年鑑（昭和十四年度版）』田中印刷出版。

郡司忠勝

1993『思い出はマニラの海に』三月書房。

合田濤

2009「複合社会の三角柱モデル—文化人類学の新たな課題」『神戸文化人類学研究』特別号: 4-49。

小島勝

1993「第二次大戦前の日本人学校教員の教育体験・意識に関する教育—バギオ・満州・上海における教員への聞き取りを通して—」『龍谷大学論集』443: 77-108。

鈴木賢士

1997『フィリピン残留日系人』草の根出版会。

鈴木譲二

1992『日本人出稼ぎ移民』平凡社。

東京財団

2005『フィリピン日系人の法的、社会的地位向上に向けた政策のあり方に関する研究』東京財団研究報告書。

中屋健式

1942『フィリピン』興亜書房。

早瀬晋三

1989a「アメリカ植民地下初期（明治期）フィリピンの日本人労働」池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』AA研東南アジア研究第1巻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

1989b『「ベンゲット移民」の虚像と実像』同文館。

ホール、スチュアート

2001「誰がアイデンティティを必要とするのか」『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』スチュアート・ホール編、宇波彰監訳、明石書店。

マクガイア、メルディス B.

2008「第3章 個人の宗教の形成」『宗教人類学』山中弘、伊藤雅之、岡本亮輔訳、明石書店。

三吉朋十

1942『比律賓の土俗』丸善。

森谷裕美子

2004『ジェンダーの民族史』九州大学出版会。

2012a「フィリピン・北部ルソンにおける日系人」『九州産業大学国際文化学部紀要』53: 107-126。

2012b「フィリピン北部ルソン日系人社会の歴史的位相」『南島史学』79・80: 144-159。

2013「フィリピン北部ルソンにおける日系人と「イゴロット」の関係性」『九州産業大学国際文化学部紀要』53: 107-126。

Afable, P. O. ed.

2004 *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.

Bagamaspad A. and Z. Hamada

1985 *A People's History of Benguet*. Baguio Printing and Publishing Company Inc. Baguio.

Chaokas, F. K.

2012 *Bontoc and Its Barangays*. Rianella Printing Press, Baguio.

Hamada, S.

1983 The Japanese In and Around Baguio Before the War. In *MEMORIAL: The Japanese in the Construction of Kennon Road*. Filipino Japanese Friendship Association of Northern Luzon, Baguio.

Jenks A. E.

1905 *Bontoc Igorot*. Department of the Interior Ethnological Survey Publication Vol.1, Bureau of Public Publication, Manila.

Reed, R. R.

1999 *City of Pines: The Origin of Baguio as a Colonial Hill Station and Regional Capital*. A-Seven Printing, Baguio. Second Edition.

Scott, W. H.

1969 *On the Cordillera*. MCS Enterprises, Manila.

Tapang Jr., B. P.

1985 *Innovation and Social Change: The Ibaloy Cattle Enterprise in Benguet*. Social Science Monograph Series 5, Cordillera Studies Center, University of the Philippines College Baguio.